赤色顔料とL字状石杵

赤色の顔料

本年6月に九州の吉野ケ里遺跡（佐賀県）で石棺内部の発掘調査が行われ、有力者の石棺に見られる赤色顔料が広い範囲で確認され、大きな話題になりました。古来から用いられてきた赤色顔料は、鉄や水銀を主成分にしたもので、世界中で古くから顔料や防腐剤などとして用いられてきました。

日本では縄文時代以降の土器や木製品に塗られる他、人を墓に埋葬する際に使われるなど、神聖な色として使用されることが多く、その痕跡は市内の遺跡などでも多く認められます。

市内の遺跡

市内では、打下古墳（勝野）の石棺内部が赤色顔料で覆われていた他、鴨稲荷山古墳（鴨）の家形石棺、二子塚古墳（安井川）の須恵器、田中36号墳（田中）の横穴式石室などで赤色顔料が使用されています。

このほか、赤色顔料を精製した際に使用されたL字状石杵（いしぎね）と呼ばれる特徴的な石杵（側面観がL字を呈する石杵）が出土しています。

赤色顔料の精製

弥生時代の終わり頃から赤色顔料の材料として辰砂（しんしゃ）と呼ばれる鉱物が多く使われるようになります。赤色顔料は、辰砂を含む原石を割って赤色の砂石を取り出し、自然石でたたきながらすり潰し、水と混ぜながら分離し選り分けます。さらに石杵で細かく粉末化し、赤色顔料のひとつである朱を精製していたとされています。

日本全国では弥生時代を中心とする遺跡から、辰砂から朱への粉末化、精製の際に使用されたL字状石杵が30点程出土し、このうち市内では鴨稲荷山古墳周辺と熊野本遺跡の2か所で出土しています。

二つのL字状石杵

鴨稲荷山古墳の周辺で採取されたと伝わる石杵は、長さ19・3㎝、幅6・4㎝、重さ2・0㎏を測ります。厚く重量感があり、赤色顔料の粉末化に実用していた道具で、磨面には使用痕と赤色顔料の付着が現在も認められます。

熊野本遺跡では、弥生時代後期末の墳丘墓が検出され、木棺跡の周辺から水銀朱とされる赤色顔料と水銀朱を加工したと考えられる長さ16・5㎝、幅12・0㎝、重さ0・78㎏を測るL字状石杵が出土しています。

土器や古墳などで赤色顔料が使用される一方で、その精製が行われていたことを示す考古資料として全国的にも注目される出土品です。

問 文化財課 ☎(25)8559

鴨稲荷古墳周辺出土の石杵

熊野本遺跡出土の石杵

編集雑感

今月号の表紙は「防災フェスタ in たかしま」のようすです。9月は「防災月間」ということで表紙に加え、特集1でも災害時に備えるための内容が掲載されています。災害はいつ発生するかわからないものなので、一人一人が日頃からしっかりとさまざまな災害に対して備えておき、いざという時には周りの人たちで助け合えるようにしましょう。(K)

広報たかしま 令和5年 9月号 No.284
発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740(25)8000(代)
https://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp

R70 古紙パルプ配合率70%再生紙を使用。